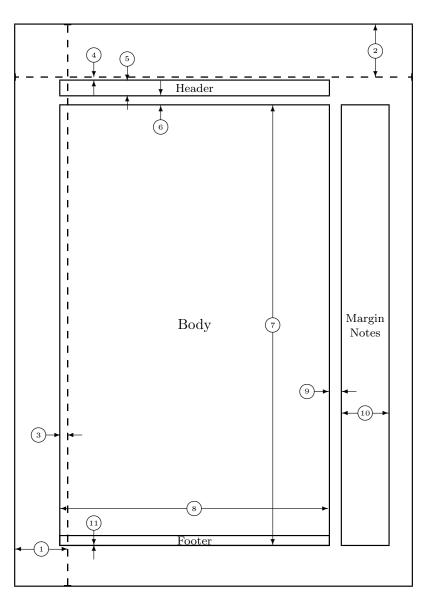
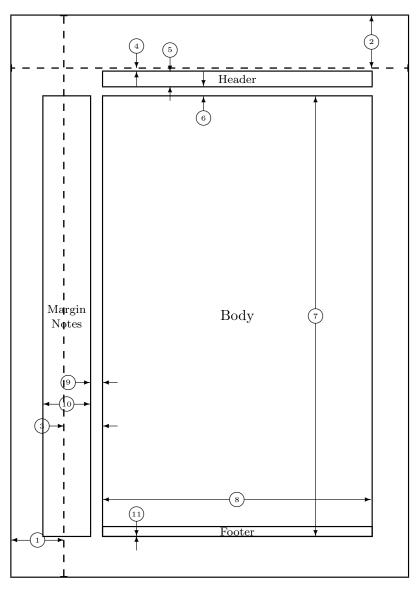
Notes on Sheaves on Manifolds

大柴寿浩



- 1 one inch + \hoffset
- 3 \oddsidemargin = -10pt
- 5 \headheight = 20pt
- 7 \textheight = 604pt
- 9 \marginparsep = 18pt
- 11 \footskip = Opt
 \hoffset = Opt
 \paperwidth = 545pt
- 2 one inch + \voffset
- 4 \topmargin = 5pt
- 6 \headsep = 14pt
- 8 \textwidth = 369pt
- 10 \marginparwidth = 64pt
 \marginparpush = 16pt (not shown)
 \voffset = 0pt

\paperheight = 771pt



- 1 one inch + \hoffset
- 3 \evensidemargin = 54pt
- 5 \headheight = 20pt
- 7 \textheight = 604pt
- 9 \marginparsep = 18pt
- 11 \footskip = Opt
 \hoffset = Opt
 \paperwidth = 545pt
- 2 one inch + \voffset
- 4 \topmargin = 5pt
- 6 \headsep = 14pt
- 8 \textwidth = 369pt
- 10 \marginparwidth = 64pt
 \marginparpush = 16pt (not shown)

\voffset = Opt

\paperheight = 771pt

はじめに

2023 年度から始めた [KS90] のセミナーのノート.

記号

次の記号は断りなく使う.

- 添字: なんらかの族 $(a_i)_{i\in I}$ を $(a_i)_i$ とか (a_i) と略記することがある.
- 近傍:位相空間 X の点 x や部分集合 Z に対し、その開近傍系をそれぞれ I_x や I_Z で表す。これらは、包含関係の逆で有向順序集合をなす。

第1章

ホモロジー代数

1.3 複体の圏

€を加法圏とする.

注意. 加法圏とは次の3つの条件(1)–(3)をみたす圏のことである.

- (1) どの対象 $X, Y \in \mathcal{C}$ に対しても $\operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ が加法群になり、どの対象 $X, Y, Z \in \mathcal{C}$ に対しても合成 \circ : $\operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z) \times \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \to \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z)$ が双線型である.
- (2) 零対象 $0 \in \mathbb{C}$ が存在する. さらに $\operatorname{Hom}_{\mathbb{C}}(0,0) = 0$ が成り立つ.
- (3) 任意の対象 $X,Y \in \mathbb{C}$ に対して積と余積が存在し、さらにそれらは同型になる. (それらを複積といい $X \oplus Y$ とかく.)

圏 C から、C の対象の複体の圏 C(C) を作ることができる。まず複体の定義をする。圏 C の対象のと射の列

$$(1.3.1) \qquad \cdots \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

を考える. この列 $X=((X^n)_{n\in \mathbf{Z}},(d_X^n)_{n\in \mathbf{Z}})$ が複体 (complex) であるとは、任意の $n\in \mathbf{Z}$ に対し

$$(1.3.2) d_X^{n+1} \circ d_X^n = 0$$

が成り立つことをいう.

圏 \mathfrak{C} の対象の複体 $X=((X^n),(d_X^n)),\ Y=((Y^n),(d_Y^n))$ の間の射を、 \mathfrak{C} の射の族 $(f^n\colon X^n\to Y^n)_{n\in \mathbf{Z}}$ で、図式

$$\cdots \longrightarrow X^{n} \xrightarrow{d_{X}^{n}} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

$$\downarrow^{f^{n}} \qquad \downarrow^{f^{n+1}}$$

$$\cdots \longrightarrow Y^{n} \xrightarrow{d_{Y}^{n}} Y^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

を可換にする, すなわちどの番号 $n \in \mathbb{Z}$ に対しても

$$(1.3.3) d_Y^n \circ f^n = f^{n+1} \circ d_X^n$$

が成り立つものとして定める.

以上の準備のもとで、Cの複体の圏 C(C)を次のように定める.

- 対象: Ob(C(C)) = {Cの複体}
- 射: $\operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathcal{C})}(X,Y) = \{\mathcal{C} \text{ の複体の射 }\}$

このとき, C(C) は加法圏になる.

圏になることの証明. $f\colon X\to Y$ と $g\colon Y\to Z$ を $\mathrm{C}(\mathfrak{C})$ の射とする. f と g の合成 $g\circ f$ は $(g^n\circ f^n)_n$ で与えられる. これがうまくいくことは

が可換になることからわかる.

$$X$$
 の恒等射は $(\mathrm{id}_{X^n})_n$ で与えられる.

加法圏になることの証明. X と Y を C の複体とする.

- (1) 射の集合のアーベル群構造 $f,g \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathfrak{C})}(X,Y)$ に対し,f+g が $(f^n+g^n)_n$ で 定まる.
- (2) 零対象の存在 C(C) の零対象 0 は

$$\cdots \rightarrow 0 \xrightarrow{0} 0 \xrightarrow{0} 0 \rightarrow \cdots$$

で与えられる.

(3) 複積の存在 X と Y の複積 $X \oplus Y$ は

$$\cdots \longrightarrow X^{n-1} \oplus Y^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1} \oplus d_Y^{n-1}} X^n \oplus Y^n \xrightarrow{d_X^n \oplus d_Y^n} X^{n+1} \oplus Y^{n+1} \longrightarrow \cdots$$
 で与えられる.

さらに C がアーベル圏ならば、C(C) もアーベル圏になる.

注意. 加法圏 C がアーベル圏であるとは次の条件 (4), (5) をみたすことをいう.

- (4) 任意の \mathfrak{C} の射 $f: X \to Y$ に対し、f の核 $\operatorname{Ker} f$ と余核 $\operatorname{Coker} f$ が存在する.
- (5) 任意の \mathcal{C} の射 $f: X \to Y$ に対し、自然に定まる射 $\operatorname{Coim} f \to \operatorname{Im} f$ は同型である.

証明. X と Y を C の複体とする.

1.3 複体の圏

(4) 核と余核の存在 複体の射 $f: X \to Y$ に対し、核 Ker f は (Ker f^n) $_n$ で、余核 Coker f は (Coker f^n) $_n$ で与えられる.

コメント (4/24). 「Ker f の differential の構成はどうなっていますか?」 次の図式を考える.

$$\cdots \longrightarrow \operatorname{Ker} f^{n} \xrightarrow{\overline{d}_{X}^{n}} \operatorname{Ker} f^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

$$\downarrow^{\iota^{n}} \qquad \downarrow^{\iota^{n+1}} \qquad \downarrow^{\iota^{n+1}} \cdots$$

$$\downarrow^{f^{n}} \qquad \downarrow^{f^{n+1}} \qquad \downarrow^{f^{n+1}} \cdots$$

$$Y^{n} \xrightarrow{d_{Y}^{n}} Y^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

ここで、 ι^n は $\operatorname{Ker} f^n$ の普遍性から自然に定まる射である。 \overline{d}_X^n : $\operatorname{Ker} f^n \to \operatorname{Ker} f^{n+1}$ が $d_X^n \circ \iota^n$ によって定められることを示せば良い.

$$f^{n+1} \circ d_{\mathbf{Y}}^n \circ \iota^n = d_{\mathbf{Y}}^n \circ f^{n+1} \circ \iota^n = d_{\mathbf{Y}}^n \circ 0 = 0$$

より, $d_X^n \circ \iota^n$ は $\operatorname{Ker} f^{n+1}$ に値を取る. したがって, \overline{d}_X^n : $\operatorname{Ker} f^n \to \operatorname{Ker} f^{n+1}$ が定まる.

(5) 余像と像が同型になること 各次数 n ごとに $\operatorname{Coim} f^n \cong \operatorname{Im} f^n$ が成り立つことから \Box

圏 $C(\mathcal{C})$ の充満部分圏 $C^+(\mathcal{C})$, $C^-(\mathcal{C})$, $C^b(\mathcal{C})$ を

$$Ob(C^{+}(\mathcal{C})) = \left\{ 0 \to X^{n} \xrightarrow{d_{X}^{n}} X^{n+1} \to \cdots \quad (n \ll 0) \right\},$$

$$Ob(C^{-}(\mathcal{C})) = \left\{ \cdots \to X^{n-1} \xrightarrow{d_{X}^{n-1}} X^{n} \to 0 \quad (n \gg 0) \right\},$$

$$Ob(C^{b}(\mathcal{C})) = \left\{ 0 \to X^{n} \to \cdots \to X^{m} \to 0 \quad (n \ll 0, m \gg 0) \right\}$$

で定める.

Cの対象 X に対し C(C) の対象

$$\cdots \to 0 \to X \to 0 \to \cdots$$

を対応させることによって、忠実充満な関手 $\mathcal{C} \hookrightarrow \mathcal{C}(\mathcal{C})$ が定まる.

k を整数とする. Cの複体

$$X: \cdots \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

に対し, X[k] を $X[k]^n = X^{n+k},$ $d^n_{X[k]} = (-1)^k d^{n+k}_X$ で定める. 図式でかくと

$$X[k] \colon \cdots \to X^{n+k-1} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k-1}} X^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} X^{n+k+1} \to \cdots$$

のようになる. X から Y への射 $f: X \to Y$ に対し, $f[k]: X[k] \to Y[k]$ を $f[k]^n = f^{n+k}$ で定める. X を X[k] に対応させることで関手 $[k]: C(\mathcal{C}) \to C(\mathcal{C})$ が定まる.この関手を次数 k のシフト関手と呼ぶ.

[k] が関手になることの証明. X[k] が複体になること:

$$(-1)^k d_X^{n+k} \circ (-1)^k d_X^{n+k-1} = (-1)^{2k} d_X^{n+k} \circ d_X^{n+k-1} = 0.$$

f[k] が複体の射になること:

$$\cdots \longrightarrow X^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} X^{n+k+1} \longrightarrow \cdots$$

$$\downarrow f^{n+k} \qquad \qquad \downarrow f^{n+k+1}$$

$$\downarrow f^{n+k+1} \qquad \qquad \downarrow f^{n+k+1}$$

$$\cdots \longrightarrow Y^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_Y^{n+k}} Y^{n+k+1} \longrightarrow \cdots$$

が可換になることを示せばよい.

$$f^{n+k+1} \circ (-1)^k d_X^{n+k+1} = (-1)^k f^{n+k+1} \circ d_X^{n+k+1} = (-1)^k d_Y^{n+k+1} \circ f^{n+k}.$$

[k] が合成を保つこと: $f: X \to Y, g: Y \to Z$ を複体の射とする. このとき

$$(g[k] \circ f[k])^n = g[k]^n \circ f[k]^n = g^{n+k} \circ f^{n+k} = (g \circ f)^{n+k} = (g \circ f)[k]^n$$

が成り立つ.

$$[k]$$
 が恒等射を保つこと: $\mathrm{id}_X[k]^n=\mathrm{id}_X^{n+k}=\mathrm{id}_{X[k]}^n$.

- ■ホモトピー C の複体の圏 C(C) から、ホモトピックな射を同一視することによって、新たな圏 K(C) が得られる。まず準備。
- $C(\mathcal{C})$ を圏 \mathcal{C} の複体の圏とする. $X,Y \in C(\mathcal{C})$ とする. $f \colon X \to Y$ が \mathcal{C} にホモトピックであるとは、 \mathcal{C} の射の族 $(s^n \colon X^n \to Y^{n-1})$ で、

(1.3.4)
$$f^{n} = d_{Y}^{n-1} \circ s^{n} + s^{n+1} \circ d_{X}^{n} \quad (n \in \mathbf{Z})$$

となるものが存在することをいう.

 $f,g:X\to Y$ に対し、f-g が 0 にホモトピックであるとき、f と g はホモトピックであるといい、 $f\simeq g$ とかく、f が 0 とホモトピックであることを $f\simeq 0$ で表す、このとき $s=(s^n)$ を f と g の間のホモトピーという、 \simeq は同値関係である、

証明. f,g,h を X から Y への C の複体の射とする.

反射律 $(s^n = 0)$ が f と f の間のホモトピーを与える.

対称律 f と g の間のホモトピーを s とするとき, -s が g と f の間のホモトピーを与える.

推移律 $f \ge g$ の間のホモトピーを s, $g \ge h$ の間のホモトピーを t とする. このとき, s+t が $f \ge h$ の間のホモトピーを与える.

命題 1.3.1. $X,Y \in C(\mathcal{C})$ に対し、 $\operatorname{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X,Y)$ の加法部分群 $\operatorname{Ht}(X,Y)$ を

1.3 複体の圏 5

で定める. 複体の射 $f\colon X\to Y$ と $g\colon Y\to Z$ のどちらかが 0 にホモトピックならば,合成 $g\circ f$ は 0 にホモトピックになる. したがって,射の合成は次の写像をひきおこす.

$$\operatorname{Hom}_{\operatorname{C}(\mathcal{C})}(Y,Z) \times \operatorname{Ht}(X,Y) \to \operatorname{Ht}(X,Z),$$

 $\operatorname{Ht}(Y,Z) \times \operatorname{Hom}_{\operatorname{C}(\mathcal{C})}(X,Y) \to \operatorname{Ht}(X,Z).$

証明. $f \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathfrak{C})}(X,Y), g \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathfrak{C})}(Y,Z)$ とする.

 $f \simeq 0$ のとき, $s \ge 0$ とのホモトピーとすると, $g \circ f \ge 0$ との間のホモトピーは

$$(g^{n-1} \circ s^n \colon X^n \to Y^{n-1} \to Z^{n-1})_n$$

で与えられる.

 $g \simeq 0$ のとき, $t \geq 0$ とのホモトピーとすると, $g \circ f \geq 0$ との間のホモトピーは

$$(t^n \circ f^n \colon X^n \to Y^n \to Z^{n-1})_n$$

で与えられる.

以上の準備のもとで、圏 C のホモトピー圏 K(C) を次のように定める.

- 対象: $Ob(K(\mathcal{C})) = Ob(C(\mathcal{C}))$
- $\mathfrak{h}: \operatorname{Hom}_{K(\mathfrak{C})}(X,Y) = \operatorname{Hom}_{C(\mathfrak{C})}(X,Y) / \operatorname{Ht}(X,Y)$
- K(C) は加法圏になる.
- $K(\mathcal{C})$ が加法圏になることの証明. 命題 1.3.1 より、射の合成がきちんと定まる.

各 $X,Y \in K(\mathcal{C})$ に対する $\operatorname{Hom}_{K(\mathcal{C})}(X,Y)$ のアーベル群構造は $\operatorname{Ht}(X,Y)$ による剰余群の構造として得られ、さらに命題 1.3.1 より、合成の双線型性が得られる.

零対象と複積は
$$C(\mathcal{C})$$
 と同様である.

圏 $K(\mathfrak{C})$ の充満部分圏 $K^+(\mathfrak{C})$, $K^-(\mathfrak{C})$, $K^b(\mathfrak{C})$ を,それぞれ $C^+(\mathfrak{C})$, $C^-(\mathfrak{C})$, $C^b(\mathfrak{C})$ と同じ対象をとって定める.

■コホモロジー \mathcal{C} をアーベル圏とする. $X \in \mathcal{C}(\mathcal{C})$ に対し,

$$Z^{k}(X) \coloneqq \operatorname{Ker} d_{X}^{k},$$

$$B^{k}(X) \coloneqq \operatorname{Im} d_{X}^{k-1},$$

$$H^{k}(X) \coloneqq \operatorname{Ker} d_{X}^{k} / \operatorname{Im} d_{X}^{k-1}$$

とおく. $H^k(X)$ を複体 X の k 次のコホモロジーという.

注意. 完全列 $0 \to X \to Y \to Z \to 0$ に対し,Z を Y の商対象といい,Y/X とかく.一般に単射 $i\colon X \hookrightarrow Y$ の余核 Coker i を Y/X とかける.

任意のkに対し H^k はC(C)からCへの加法関手を定める.

$$(1.3.6) H^k(X) = H^0(X[k])$$

 $f\colon X\to Y$ が 0 とホモトピックならば, $H^k(f)\colon H^k(X)\to H^k(Y)$ は 0. よって H^k は $\mathrm{K}(\mathcal{C})$ から \mathcal{C} への関手を定める.

完全列たち

$$\begin{split} X^{k-1} &\to Z^k(X) \to H^k(X) \to 0, \\ 0 &\to H^k(X) \to \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \to X^{k+1}, \\ 0 &\to Z^{k-1}(X) \to X^{k-1} \to B^k(X) \to 0, \\ 0 &\to B^k(X) \to X^k \to \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \to 0, \\ 0 &\to H^k(X) \to \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \xrightarrow{d_X^k} Z^{k+1}(X) \to H^{k+1}(X) \to 0. \end{split}$$

命題 1.3.2. $0 \to X \to Y \to Z \to 0$ を $C(\mathcal{C})$ の完全列とする. このとき、 \mathcal{C} における次の長完全列が存在する.

$$\cdots \to H^n(X) \to H^n(Y) \to H^n(Z) \xrightarrow{\delta} H^{n+1}(X) \to \cdots$$

■切り落とし $X \in C(\mathcal{C})$ と整数 n に対し、 $\tau^{\leq n}(X), \tau^{\geq n}(X) \in C(\mathcal{C})$ を

で定める. このとき, C(C) における次の射が得られる.

$$\tau^{\leq n}(X) \to X, \quad X \to \tau^{\geq n}(X),$$

 $\sharp k, n' \leq n \Leftrightarrow \sharp k$

$$\tau^{\leqq n'}(X) \to \tau^{\leqq n}(X), \quad \tau^{\geqq n'}(X) \to \tau^{\geqq n}(X).$$

- - 2. 自然な射 $H^k(X) \to H^k(\tau^{\geq n}(X))$ は $k \geq n$ ならば同型であり,k < n では $H^k(X) = 0$ である.

注意 1.3.4. ホモトピー同値

1.4 写像錐

 \mathfrak{C} を加法圏とし $f: X \to Y$ を $\mathfrak{C}(\mathfrak{C})$ の射とする.

定義 1.4.1. f の写像錐 M(f) とは次で定まる $C(\mathcal{C})$ の対象である.

$$\begin{cases} M(f)^n = X^{n+1} \oplus Y^n, \\ d^n_{M(f)} = \begin{bmatrix} d^n_{X[1]} & 0 \\ f^{n+1} & d^n_Y \end{bmatrix} \end{cases}$$

1.4 写像錐 7

射 $\alpha(f)$: $Y \to M(f)$ と $\beta(f)$: $M(f) \to X[1]$ を次で定める.

(1.4.1)
$$\alpha(f)^n = \begin{bmatrix} 0 \\ \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix},$$

$$\beta(f)^n = \begin{bmatrix} \mathrm{id}_{X^{n+1}} & 0 \end{bmatrix}.$$

コメント (4/24). 「どうして逆に $X \to M(f)$ や $M(f) \to Y$ じゃないんですか?」 例えば,逆に $\gamma^n \colon M(f)^n \to Y^n$ を $\begin{bmatrix} 0 & \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix}$ で定めようとしても,

$$\begin{split} \gamma^{n+1} \circ d^n_{M(f)} &= \begin{bmatrix} 0 & \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} d^n_{X[1]} & 0 \\ f^{n+1} & d^n_Y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} f^{n+1} & d^n_Y \end{bmatrix}, \\ d^n_Y \circ \gamma^n &= d^n_Y \circ \begin{bmatrix} 0 & \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & d^n_Y \end{bmatrix} \end{split}$$

となり、両者は一致しない.したがって、 γ は複体の射にならない. $X \to M(f)$ も同様である.したがって、M(f) に対して定まる自然な射は α, β のようにせざるを得ない.

補題 1.4.2. 任意の $C(\mathcal{C})$ の射 $f\colon N\to Y$ に対し、 $\phi\colon X[1]\to M(\alpha(f))$ で次の条件をみたすものが存在する.

- 1. ϕ は $K(\mathcal{C})$ で同型である,
- 2. 次の図式は K(C) で可換になる:

$$Y \xrightarrow{\alpha(f)} M(f) \xrightarrow{\beta(f)} X[1] \xrightarrow{-f[1]} Y[1]$$

$$\downarrow^{\operatorname{id}_{Y}} \qquad \downarrow^{\operatorname{id}_{M(f)}} \qquad \downarrow^{\phi} \qquad \downarrow^{\operatorname{id}_{Y[1]}}$$

$$Y \xrightarrow{\alpha(f)} M(f) \xrightarrow{\alpha(\alpha(f))} M(\alpha(f)) \xrightarrow{\beta(\alpha(f))} Y[1].$$

2023/05/01

1.5 三角圏

 \mathfrak{C} を加法圏とし、 $T:\mathfrak{C}\to\mathfrak{C}$ を自己関手とする。 \mathfrak{C} の三角とは射の列

$$X \to Y \to Z \to T(X)$$

のことである.

定義 1.5.1. 三角圏 $\mathfrak C$ は次のデータ (1.5.1), (1.5.2) と規則 (TR0)–(TR5) からなる. 1.5.1 データ

- (1.5.1) 加法圏 \mathcal{C} と自己関手 $T: \mathcal{C} \to \mathcal{C}$ の組,
- (1.5.2) 特三角 (distinguished triangle) の族.
- 規則 (TR0) 特三角に同形な三角は特三角である.
 - (TR1) 任意の対象 $X \in \mathfrak{C}$ に対し, $X \xrightarrow{\mathrm{id}_X} X \longrightarrow 0 \longrightarrow T(X)$ は特三角である.
 - (TR2) Cの任意の射 $f: X \to Y$ は特三角 $X \xrightarrow{f} Y \to Z \to T(X)$ に埋め込める. つまり $Z \in \mathbb{C}$ で $X \xrightarrow{f} Y \to Z \to T(X)$ が特三角となるものが存在する.
 - (TR3) $X \xrightarrow{f} Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X)$ が特三角であることと $Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X) \xrightarrow{-T(f)} T(Y)$ が特三角であることは同値である.
 - (TR4) 2つの特三角 $X \xrightarrow{f} Y \to Z \to T(X), X' \xrightarrow{f'} Y' \to Z' \to T(X')$ に対し、可換図式

$$X \xrightarrow{f} Y$$

$$\downarrow u \qquad \qquad \downarrow v$$

$$X' \xrightarrow{f'} Y'$$

は特三角の射に埋め込める.

(TR5) (八面体公理). 3つの特三角

$$X \xrightarrow{f} Y \to Z' \to T(X),$$

 $Y \xrightarrow{g} Z \to X' \to T(Y),$
 $X \xrightarrow{g \circ f} Z \to Y' \to T(X)$

に対し,

1.6 圏の局所化

第2章

層

アーベル層の圏はアーベル圏になる. したがって層の導来圏が考えられる.

・⊗・の導来関手を考えたいが、テンソルに関する複体が有界になるとは限らないので、 平坦分解の長さが有限になるという仮定をおく.

2.1 弱大域次元

命題 **2.1.1**. *A* を環とする.

- 1. 自由加群は射影加群である.
- 2. 射影加群は自由加群の自由加群の直和因子である.
- 3. 射影加群は平坦加群である.
- 4. $n \ge 0$ を整数とする. 次の条件 (a)–(b)op は同値である.
 - (a) 任意の j > n, $N \in \text{Mod}(A^{\text{op}})$, $M \in \text{Mod}(A)$ に対し、 $\text{Tor}_{i}^{A}(N, M) = 0$
 - (b) 任意の $M \in \text{Mod}(A)$ に対し、分解

$$0 \to P^n \to \cdots \to P^0 \to M \to 0$$
 (P^j は平坦)

が存在する.

 $(b)^{op}$ 任意の $M \in Mod(A^{op})$ に対し、分解

$$0 \to P^n \to \cdots \to P^0 \to M \to 0$$
 $(P^j$ は平坦)

が存在する.

証明. 1. M を自由加群とする. 左 A 加群の全射 $g: N \rightarrow N'$ に対し,

$$g_* \colon \operatorname{Hom}_A(M,N) \to \operatorname{Hom}_A(M,N') \text{ in } \operatorname{Mod}(\mathbf{Z})$$

が全射であることを示す。 $\psi\colon M\to N'$ を A 加群の射とする。I を $M\cong A^{\oplus I}$ となる添字集合とすると任意の $m\in M$ は,M の生成系 (m_i) と $(a_i)_i\in A^{\oplus I}$ を用いて, $m=\sum_{i\in I}a_im_i$ とかける。このとき,

$$\psi(m) = \sum_{i} a_i \psi(m_i) \in N'$$

10 第2章 層

であり、g が全射なので、 $n \in N$ で

$$g(n) = \psi(m) = \sum_{i} a_i \psi(m_i), \quad \psi(m_i) = g(n_i)$$

となるものがある. この $(n_i)_i$ に対して, $\phi: M \to N$ を

$$\phi(m_i) = n_i$$

で定めると,

$$(g_*(\phi))(m_i) = g \circ \phi(m_i) = g(n_i) = \psi(m_i)$$

となる.

2. P を射影加群とする. 自由加群 $A^{\oplus I}$ と全射 p: $A^{\oplus I} woheadrightarrow P$ が存在する. 実際, I=P として,p を $p((a_x)_{x\in P})=\sum_{x\in P}a_xx$ と定めればよい. $Q=\operatorname{Ker} p$ とすると,

$$0 \to Q \hookrightarrow A^{\oplus I} \twoheadrightarrow P \to 0$$

は完全列である。このとき,P が射影加群であることから, id_P に対して, $u\colon P\to A^{\oplus I}$ で

$$p_*(u) = p \circ u = \mathrm{id}_P$$

となる者が存在する. したがって、上の完全列は分裂し、 $A^{\oplus I}\cong P\oplus Q$ となる. 3.

2.2 非特性変形補題 11

2.2 非特性変形補題

命題 **2.2.1** ([KS90, Prop. 2.5.1]). X を位相空間とし,Z を部分空間とする. F を X 上の層とし,自然な射

$$\psi \colon \varinjlim_{U \in I_Z} \Gamma(U; F) \to \Gamma(Z; F)$$

を考える.

- (i) ψ は単射である.
- (ii) X がハウスドルフで Z がコンパクトならば、 ψ は同型である.

命題 **2.2.2** ([KS90, Prop. 1.12.4]).

$$\phi_k \colon H^k(\varinjlim X) \to \varprojlim H^k(X_n)$$

について, $H^{i-1}(X_n)$ が ML 条件を満たすならば, ϕ_k は一対一対応である.

命題 2.2.3 ([KS90, Prop. 1.12.6]). $(X_s, \rho_{s,t})$ を実数を添字とする射影系とする.

$$\lambda_s \colon X_s \to \varprojlim_{r < s} X_r, \quad \mu_s \colon \varinjlim_{t > s} X_t \to X_s$$

がどちらも単射(全射)ならば、すべての実数 $s_0 \le s_1$ に対し、 $\rho_{s_0,s_1}\colon X_{s_1}\to X_{s_0}$ は単射(全射)となる.

命題 **2.2.4** ([KS90, Prop. 2.7.2, 非特性変形補題]). X をハウスドルフ空間とし, $F \in D^+(\mathbf{Z}_X)$ とする。また, $(U_t)_{t \in \mathbf{R}}$ を X の開集合の族で次の条件 (i)–(iii) をみたすものとする.

- (i) 任意の実数 t に対し、 $\bigcup_{s < t} U_s = U_t$ が成り立つ.
- (ii) 任意の実数 $s \le t$ に対し, $\overline{U_t U_s} \cap \text{supp } F$ はコンパクト集合である.
- (iii) 実数 s に対して $Z_s=\bigcap_{t>s}\overline{U_t-U_s}$ とおくとき,任意の実数 $s\leq t$ と任意の点 $x\in Z_s-U_t$ に対して $(\mathrm{R}\Gamma_{X-U_t}(F))_x=0$ が成り立つ.

このとき、任意の実数tに対して、次の同型が成り立つ。

$$R\Gamma\left(\bigcup_{s\in\mathbf{R}}U_s;F\right)\stackrel{\sim}{\longrightarrow} R\Gamma(U_t;F)$$

12第2章 層

証明.次の条件を考える.

$$(a)_k^s : \lim_{t \to s} H^k(U_t; F) \xrightarrow{\sim} H^k(U_s; F)$$

$$(a)_k^s : \qquad \varinjlim_{t>s} H^k(U_t; F) \xrightarrow{\sim} H^k(U_s; F)$$
$$(b)_k^t : \qquad \varprojlim_{s< t} H^k(U_s; F) \xleftarrow{\sim} H^k(U_t; F)$$

任意の実数 s と任意の整数 k に対して $(a)_k^s$ が、任意の実数 t と任意の整数 $k < k_0$ に対 して $(b)_k^t$ が成り立つとする. このとき, k_0 に対し, $(b)_{k_0}^t$ が成り立つことを示す. 命題 2.2.3 より, $((a)_k^s$ の方が μ_s , $(b)_k^t$ の方が λ_t として)各次数 $k < k_0$ と各実数 $s \le t$ に 対し,

$$(2.2.1) H^k(U_t; F) \xrightarrow{\sim} H^k(U_s; F)$$

が成り立つ. このとき,tを固定して、射影系 $\left(H^{k_0-1}\left(U_{t-\frac{1}{n}};F\right)\right)_{n\in\mathbb{N}}$ を考えると、こ れは ML 条件をみたす.

::) 任意の $n \in \mathbb{N}$ に対し,

$$\rho_{n,p}\left(H^{k_0-1}\left(U_{t-\frac{1}{p}};F\right)\to H^{k_0-1}\left(U_{t-\frac{1}{n}};F\right)\right)$$

はすべて同形なので、当然安定.

よって、命題 2.2.2 より $(b)_{k_0}^t$ が従う. k に関する帰納法により、どの $t \in \mathbf{R}$ と $k \in \mathbf{Z}$ に 対しても $(b)_k^t$ が成り立つ.

命題 2.7.1 を
$$\left(H^{k}\left(U_{n};F\right)\right)_{n\in\mathbf{N}}$$
 に用いると \leftarrow わかってない

kに関する帰納法で、定理の結論

$$R\Gamma\left(\bigcup_{s\in\mathbf{R}}U_s;F\right)\stackrel{\sim}{\longrightarrow} R\Gamma(U_t;F)$$

が従う.

 $(a)_k^s$ の証明 $\ X$ を $\mathrm{supp}\, F$ におきかえて、どの実数 $s \leq t$ に対しても $\overline{U_t - U_s}$ はコンパ クトとしてよい.次の d.t. を考える*1.

$$R\Gamma_{(X-U_t)}(F)|_{Z_s} \to R\Gamma_{(X-U_s)}(F)|_{Z_s} \to R\Gamma_{(U_t-U_s)}(F)|_{Z_s} \xrightarrow{+1}$$
.

仮定 (iii) より, 左と真ん中の 2 つは 0 なので, d.t. の性質から, $R\Gamma_{(U_t-U_s)}(F)|_{Z_s}=0$ と なる. したがって、任意の $k \in \mathbb{Z}$ と $t \ge s$ に対し、

$$0 = H^{k}(Z_{s}; R\Gamma_{(U_{t}-U_{s})}(F))$$

$$= \varinjlim_{U \supset Z_{s}} H^{k}(U \cap U_{t}; R\Gamma_{X-U_{s}}(F))$$

$$R\Gamma_{Z'}(F) \to R\Gamma_Z(F) \to R\Gamma_{Z-Z'}(F) \xrightarrow{+1}$$

を用いる. 但し, Z は X の局所閉集合, Z' は Z の閉集合である.

^{*1 [}KS90, (2.6.32)] \mathcal{O} d.t.

2.2 非特性変形補題 13

となる.

 $\mathrm{R}\Gamma_{U_t-U_s}(F)$ は X 上の層で,それを Z_s に制限した $\mathrm{R}\Gamma_{U_t-U_s}(F)|_{Z_s}$ は Z_s 上の層である. Z_s での大域切断 $\mathrm{R}\Gamma(Z_s;\mathrm{R}\Gamma_{U_t-U_s}(F)|_{Z_s})$ のコホモロジーを とっているので,[KS90, Notations 2.6.8] の 2 番目の記号を用いることに なる.

 Z_s はハウスドルフ空間 X のコンパクト集合 $\overline{U_t-U_s}$ の共通部分として表されているので,コンパクトである(X の置き換えがここに効いている). したがって, $[KS90, Remark\ 2.6.9\ (ii)]$ の場合に当てはまり,そこでの記号を用いて書くと

$$H^{j}(Z;F) \simeq \underset{U \in I_{Z}}{\lim} H^{j}(U;F)$$

が成り立つ. これが上の式の2つ目の変形. 詳しく書くと,

$$H^{k}(Z_{s}; R\Gamma_{U_{t}-U_{s}}(F)) = \varinjlim_{U \in I_{Z}} H^{k}(U; R\Gamma_{U_{t}-U_{s}}(F))$$
$$= \varinjlim_{U \in I_{Z}} H^{k}(U \cap U_{t}; R\Gamma_{X-U_{s}}(F))$$

ここで,2 つ目の変形は次のように考える. U_t-U_s に台を持つ層の U 上の切断は $U\cap U_t$ 上で切断を考えても同じ.台の方も,U が Z_s に十分近ければ $X-U_s$ で考えても同じ.

参考文献

- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, Sheaves on Manifolds, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.
- [KS06] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, Categories and Sheaves, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 332, Springer, 2006.
- [Sh16] 志甫淳, 層とホモロジー代数, 共立出版, 2016.